

日中戦争下の仏領インドシナと中国： 外務書記生のアジア体験から

Indochina of French Territory and China under Sino-Japanese War:
As seen by a Clerk in the Japanese Department of Foreign Affairs in Asia.

湯山英子

YUYAMA Eiko

北海道大学大学院経済学研究院

地域経済経営ネットワーク研究センター・研究員

Researcher, Center for Regional Economic and Business Networks, Faculty of Economics and

Business, Hokkaido University

E-mail: y.yama.eiko@gmail.com

Abstract

The paper aims to offer an account of the situation of Japanese nationals living in both the French and the Chinese territorial provinces of Indochina as they were experienced at first-hand by a clerk working in the Japanese Consulate in Hanoi during the Sino-Japanese war.

While he was on duty at the Japanese Consulate in Hanoi, then the capital of the regions of Indochina governed by France, he crossed the Vietnamese border into territory governed by the Chinese, and as this violated the integrity of the border, he was arrested and held as a prisoner of war. As a result of his experiences as a prisoner of war in China he joined an anti-war movement, and during the rule of the Chongqing Nationalist Government he devoted himself to working with other Japanese nationals in a movement to outlaw war.

Although his name occurs in a number of documents held in both the Japan and Taiwanese archives, no coherent account of his story exists, and a further purpose of this paper is to assemble the various details of his story that can be traced and put them on record.

はじめに

本稿は、日中戦争期仏領インドシナに在留した日本の一外務書記生のアジア体験を通して、仏領インドシナおよび中国における日本人の状況を明らかにしようとするものであ

る。この外務書記生は在ハノイ日本領事館勤務だったところ、1938年末に仏領インドシナから中越国境を越えて中国の捕虜となり、国民党重慶政府支配下における日本人の反戦活動に傾倒していくことになった。仏領インドシナと中国の両方を体験した稀有な人物であり、彼に関する記述が複数の文献で散見するも、整理し、まとめて記録されたものは皆無である¹⁾。

この外務書記生の名前を筆者が知ったのは、今から20年以上も前である。その間に、関連する研究が進展し、さらに日本だけでなく台湾やベトナムでの史・資料の整理および公開が進んできたことで、彼に関する新たな資料が見つかった。また、個人所有の遺稿が整理され公開に結びつくケースもあり、その中の一つにはこの書記生の記述を確認することができる²⁾。こうしたことから、一個人とは言え、歴史的な位置づけが可能になってきた。但し、本稿で扱う人物が外交の一端を担う職業に就いていたため、一個人と言い切れない部分がある。

筆者はこれまで、戦前および戦中の仏領インドシナにおける日本商の研究を積み重ねてきたが、なかでも日本人社会の構成員に注目し、時期によってそれがどう変化してきたのか、その実態の解明を試みてきた³⁾。移民社会において構成員の分類は、その時代を反映するものであり、第一次世界大戦以降の東南アジアの日本人社会は、日本の経済進出が活発となり、大きな転換点を迎えた。次の波は、アジア太平洋戦争による日本軍の占領地拡大に伴う経済進出である。仏領インドシナは、日本軍の仏印進駐以降、フランスとの共同支配が行われた特殊な地域である。

仏領インドシナ研究において、この日仏共同支配期の研究蓄積はあるものの、1937年の日中戦争から1940年の北部仏印進駐までの3年間ほどは、僅かに言及される程度であった。日本の「国策の基準」が南進政策に方向転換し、いち早く台湾拓殖株式会社（以下、台湾拓殖）が仏領インドシナにも進出することになり、徐々に現地日本社会にも変化が見られるようになっていた。しかし、仏領インドシナが日本や植民地台湾からも注目はされていたものの、実際に大挙しての組織的な経済進出は1940年代になってからである。

1) 大屋久寿雄『仏印進駐記』興亞書房、1941年。Agnes, Smedley (1943), *Battle Hymn of China*. Alfred A. Knopf. (アグネス・スメドレー、高杉一郎訳『中国の歌ごえ』みすず書房、1957年)。高杉一郎『大地の娘 — アグネス・スメドレーの生涯』岩波書店、1988年。丘成「反战斗士塩見聖策」中国民主同盟中央委員会『群言』（北京市）第3期、1995年3月。大屋久寿雄『戦争巡歴』柘植書房新社、2016年。また、近年では加納寛が塩見聖策を取り上げるも、新聞記事の内容にとどまっている（加納寛「書院生、東南アジアに行く — 東亜同文書院生の見た在留日本人」加納寛編『書院生、アジアに行く — 東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』あるむ、2017年、179、180頁）。

2) 前掲、大屋『戦争巡歴』。

3) 湯山英子「仏領インドシナにおける日本人社会 — 日仏共同支配前を中心に」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、2008年。湯山英子「仏領インドシナにおける日本商の活動 — 1910年代から1940年代はじめの三井物産と三菱商事の人員配置から考察」『経済学研究』第62巻第3号、2013年2月。湯山英子「仏領インドシナにおける対日漆貿易の展開過程 — 1910年代～1940年代初めの現地日本人商店からの考察」『社会経済史学』第77巻第3号、2011年11月。

また、日本人の構成員には外務省関係者もおり、1940年までは外務書記生が館員の大多数を占めていたが、大きく組織が変化するのは1940年代になってからである⁴⁾。1937年から1940年までは、はざまの時期であり、軍事および経済進出への助走段階とも言える。その間、現地日本人にとって微妙な立ち位置であった。また、一方の中国研究においては、日中戦争に関する研究蓄積があり⁵⁾、その中で国民党重慶政府下における日本人の反戦活動に関する研究は、共産党政府の日本人反戦運動の研究に比較してそう多くはない⁶⁾。

こういった状況を踏まえて、本稿ではまず、この外務書記生の行動を整理・記録することからはじめたい。次に、両地域での行動を検討するとともに、彼を通して日本人の置かれた状況を明らかにする。この外務書記生のアジア体験から日本とアジアとの関係の一側面を示すことが本稿の目的である。整理するにあたり、次の①～⑤のように内容を分けた。①仏領インドシナ体験まで、②中国側に拉致されたときの日本側の対応、③国民党政府の対応、④中国での活動、⑤引揚げと戦後、この5つにそって検討していきたい。

1、同盟通信の大屋久寿雄と塩見聖策

本稿で対象とする在ハノイ日本領事館の書記生、塩見聖策の存在は、大屋久寿雄の著書『仏印進駐記』(1942)によって触れられている。1940年代は、日本の南進政策の影響で、数々の東南アジアの資源に関する本や現地滞在記などの情報本が発行されるようになり、この大屋久寿雄の著書もそのなかの一冊である。この本に登場する塩見聖策は、大屋久寿雄とハノイで懇意にしていたものの、突如として1938年12月末に中国との国境から姿を消した。外務書記生としてハノイで意気揚々と働く塩見聖策の様子は、大屋によって次のように記述されている⁷⁾。

こつこつ佛印事情を研究して、自分で謄写版刷りの研究資料を発行していた程の熱心家。佛字紙の不敬記事などを発見すると自分勝手に飛び出して行って、抗議して来たりしては、佛字紙に「日本総領事館では、総領事の仕事を書記生がするものらしい」などと揶揄されたりしていた熱情漢でもあった。

大屋久寿雄は、同盟通信社の特派員として1938年8月から翌1939年7月までの1年

4) ハノイ領事館がハノイ大使府になるのは1941年8月(閣議決定)である。

5) 中央大学人文科学研究所編『日中戦争』中央大学出版部、1993年。小林英夫、林道生『日中戦争史論』御茶の水書房、2005年。藤原彰・姫田光義編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店、1999年。

6) 菊池一隆『日本人反戦兵士と日中戦争』御茶の水書房、2003年。井上桂子『中国で反戦平和活動をした日本人』八千代出版、2012年。前掲、藤原・姫田『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』。

7) 前掲、大屋『仏印進駐記』245頁。

間、ハノイを中心に活動し、重慶にいた蒋介石への援助物資の輸送状況を取材していた。大屋は仏領インドシナ当局からスパイ容疑がかかり、度々軍法会議に出廷していた⁸⁾。国策的な通信社である同盟通信社が海外通信網を拡大したのは、1937年からであり、中国大陸での規模拡大から始まり、東南アジアにもその影響が及び、香港支局とハノイ支局が開設されて人員を配置したのは1938年からである⁹⁾。

大屋久寿雄の仏印での足跡が明らかになったのは、彼の遺稿が見つかったことによる¹⁰⁾。その遺稿となったものは、戦後1946年から大屋が病死する1951までの間に書かれたもので、それから65年の時を経て『戦争巡歴』(2016)として出版された。塩見の失踪については、大屋の書いた次のような「河内(ハノイ)発同盟」の新聞記事があるので、それと照らし合わせてみたい。

〈朝日新聞〉

- ①「塩見書記生、拉致さる 仏印で支那兵に(河内3日発同盟)」(1939年1月4日)
- ②「塩見書記生は無事(河内5日発同盟)」(1939年1月6日)
- ③「塩見書記生、重慶護送(上海24日発同盟)」(1939年1月25日)
- ④「塩見氏依然龍州に(香港特電3日発)」(1939年2月4日)

〈読売新聞〉

- ①「塩見書記生 佛印で拉致さる 武装支那兵が襲撃(河内3日発同盟)」(1939年1月4日)
- ②「書記生拉致の詳報来る 支那兵の佛印侵入」(1939年1月5日)
- ③「塩見書記生無事(河内5日発同盟)」(1939年1月6日)

塩見拉致事件の第一報は、朝日新聞の「塩見書記生、拉致さる 仏印で支那兵に」(1939年1月4日)、次に「塩見書記生は無事」(1月6日)、「塩見書記生、重慶護送」(1月25日)に続き、「塩見氏依然龍州に」(2月4日)が最後の記事となる。第一報の内容は、塩見聖策が1938年12月29日にハノイから中国広西省の国境付近まで視察に出向き、中国側の鎮南関(現:友誼関)までの約200メートル仏印側に中国兵が現れて拉致されたことが書かれている。

年が明けて、1939年1月6日までの朝日新聞と読売新聞の両記事は、大屋が書いたものであるが、次は、1月25日と2月4日付けの上海と香港からの記事では、塩見が無事であったことが確認されている。1月25日の記事では、広西省龍州から桂林に護送され、

8) 前掲、大屋『仏印進駐記』4、5頁。前掲、大屋『戦争巡歴』180頁。

9) 有山輝雄『情報覇権と帝国日本Ⅱ 通信技術の拡大と宣伝戦』吉川弘文館、2013年、370-372頁。

10) 毎日新聞2016年9月6日東京朝刊。

スパイ容疑のため重慶の軍法会議にかけられることになったようだが、翌2月の記事の香港領事談では、龍州にいたことが確認されていた。しかし、塩見は仏領インドシナ(以下、仏印とする)に戻ることなく、新聞記事からも消え、その後の中国側での様子さえ知ることができなくなった。では、いったい塩見は中国でどのような境遇に遭ったのであろうか。それにはまず、塩見の経歴と仏印での様子を次に整理してみた。

2、塩見聖策の仏印経験

塩見聖策は、拉致された当時の年齢は27歳だった。奈良県出身で大阪外国語学校の仏語部11期生で1936年に卒業している。大阪外国語学校の仏語部では、1935年からフランス文化研究会を組織し、『L'Aurore (ローロール)』という研究誌を発行していた。そのなかで塩見の書いた「佛国新聞概要」(8号1936年)が掲載されており、フランスで発行されている新聞を紹介している。同号には井出浅亀の「ランボーとラデーゲへの或るヒント」「モリーの根」という論考が2本掲載されていた。井出浅亀は、『海南島より仏印へ』(1941年)や『佛印研究』(1941)、『佛領ニュー・カレドニア』(1940年)など1940年代には積極的に仏領関連の著書を出している専門家である¹¹⁾。井出もまた大阪外国語学校仏語部を卒業し、1940年当時は大阪野村合名会社の海外調査部で、タイ、カンボジア、ベトナムを調査していた¹²⁾。井出浅亀と塩見は、同時代をアジアで活動していたことになる。仏語部の助教授であった畠中敏郎もまた、著書の『仏印風物誌』(1943)で仏印のハノイ領事館を訪問したことが書かれており、大阪外国語学校出身の塩見のことに触れていた¹³⁾。

仏語部には、塩見と同じ11期生に菅原鼎がおり、彼の回想録によると¹⁴⁾、彼らが3年生になると世の中は不況で、仏語部卒業生には厳しい就職活動となっていたようである。そうした状況で、菅原鼎は満鉄に就職が決まった。菅原によると満鉄への就職希望者は「支那語部7人、露語部6人、仏語2人が一次試験に合格」となっており、菅原は最終試験に残り採用され満鉄奉天駅勤務となった。表1は、同期生の卒業後の進路である。ほとんど大阪や神戸の国内勤務であり、日本の植民地を含む海外での就職はごく僅かである。菅原によると「塩見は、昨年外務省留学生を受験して失敗したため、今年は書記生を受験する予定」であった。実際には、1935年4月に外務書記生に合格している。6月に中国の雲南に出張し、そのまま臨時雲南在勤となった。仏印へは1936年2月8日付でハノイ勤務となっ

11) 井出浅亀『海南島より仏印へ』皇国青年教育協会、1941年。『佛印研究——資源の王國と安南帝国』皇国青年教育協会、1941年。『佛領ニュー・カレドニア』出版者不明、1940年。

12) 大阪毎日新聞1940年11月14日(神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫)。

13) 畠中敏郎『仏印風物誌』生活社、1943年、84頁。

14) 菅原鼎「仏語部11回」『大阪外国語大学70年史・資料集』大阪外国語大学同窓会、1989年、89-93頁。

ていた¹⁵⁾。大阪外国語学校の卒業を前に着任となったことになる。外務省の入職口には、外交官及領事官と外務書記生の2つがあり、前者は今でいうキャリアにあたるであろう。

表1 大阪外国語学校卒業後の就職先
(仏語部・第11回1935年卒業)

| 名 前 | 就 職 先 |
|-------|--------------|
| 天田利男 | 立教大学 |
| 倉森茂夫 | 朝鮮京城府ベルギー領事館 |
| 本所虎夫 | 田島商店 |
| 井原晃 | 神戸飯野汽船会社 |
| 石田堂 | 国際商事 |
| 板坂健二 | 野村生命保険会社 |
| 笠井知之 | |
| 栗田英雄 | 菅沼商店 |
| 眞野太一郎 | 神戸オモダカ商店 |
| 松本博 | 佐川商店 |
| 森征逸 | 三井生命神戸支店 |
| 村松虎夫 | 田島商店 |
| 長岡謙一郎 | |
| 中井雄治 | 在バリー |
| 南部博 | 青田勝洋行 |
| 西正 | エヌ・エー・タナワラ商会 |
| 西川仁男 | 鐘紡神戸営業部 |
| 大島昌信 | 大阪市役所水道局 |
| 坂上國三郎 | 静岡市商工奨励館 |
| 塩見聖策 | ハノイ帝国領事館 |
| 菅原鼎 | 満鉄奉天駅 |
| 唯井猛 | 伊藤忠商事会社 |
| 高田眞一 | 宮崎商店輸出部 |
| 寺倉幸一 | 株式会社楠商店 |
| 上島博 | 神戸梶村商店 |
| 鶴尾宣 | 大阪阿弗利加輸出組合 |
| 山本正行 | 大阪商大学部 |
| 依田四郎 | サワト商店 |

(出所)大阪外国語学校同窓会本部『会員名簿昭和十一年十二月』
1936年12月、84～85頁より作成。

15) 塩見の人事記録は、外務省外交資料『外務省年鑑(昭和12年12月編)』第33号、449頁。『外務省報(昭和10年7月1日)』第326号、12頁。『外務省報(昭和11年2月15日)』第341号、8頁。当初の人事記録では、塩見聖策「Shusaku Shiomi」となっており、どの時点で「聖」になったかは分からない。自筆の文書では「聖」のため、本稿では「聖策」に統一して使用する。

次に、在仏印領事館の館員数を見ていこう。仏印での外務省関係者の人数は、表2に示したように、総領事以外はほとんど書記生で占められていた。東亜同文書院の学生、35期生第3班が1938年6月に仏印を訪問した際に、塩見に会っていた。日中戦争に突入してから東南アジア各地では、華僑による排日運動が激しくなっており、仏印でも同様な状況であったが¹⁶⁾、塩見からは排日のことよりも「フランス人からの日本人への監視はすこぶる嚴重で、いつもどこからか監視の目が光っている」と忠告されていた。また、塩見は「仏印当局の反日援支態度と日本人迫害」を強く批判していた。彼の熱い態度を書院生は次のように感じ、記していた¹⁷⁾。

表2 ハノイ・サイゴン領事館員（1936年1月～1940年8月）

| | ハノイ総領事館 | サイゴン領事館 |
|-------------|--|--|
| 1936年(1/1) | 宗村丑生(総領事) | 高澤貞義(領事) 伊藤憲三(副領事) 帰朝中 |
| 1936年(7/1) | 宗村丑生(総領事) 伊藤明(外務書記生) 塩見聖策(外務書記生) 庵原榮治(外務書記生) | 高澤貞義(領事) 伊藤憲三(副領事) 帰朝中 手塚浩介(外務書記生) 園山春作(外務書記生) 大林茂(外務書記生) |
| 1937年(1/1) | 宗村丑生(総領事) | 高澤貞義(領事) 伊藤憲三(副領事) 帰朝中 |
| 1937年(7/1) | 宗村丑生(総領事) 伊藤明(外務書記生) 塩見聖策(外務書記生) 白根淳(外務書記生) | 高澤貞義(領事) 伊藤憲三(副領事) 帰朝中 手塚浩介(外務書記生) 園山春作(外務書記生) 大林茂(外務書記生) 不破清(外務書記生) 松本章治(外務書記生) |
| 1938年(1/1) | 宗村丑生(総領事) | 高澤貞義(領事) 伊藤憲三(副領事) 帰朝中 |
| 1938年(7/1) | 宗村丑生(総領事) 橋丸大吉(外務書記生) 伊藤明(外務書記生) 塩見聖策(外務書記生) 松本章治(外務書記生) | 高澤貞義(領事) 帰朝中 中山又次(外務書記生) 園山春作(外務書記生) 不破清(外務書記生) |
| 1939年(1/20) | 鈴木六郎(総領事) 宗村丑生(総領事) 帰朝中 | 高澤貞義(領事) 帰朝中 |

16) 『佛領印度支那に於ける華僑』満鉄東亜経済調査局、1939年、207-210頁。

17) 「暹羅あちこち」『靖亜行』東亜同文書院、1939年、327-328頁 [大旅行誌30]。

| | | |
|--------------|--|---|
| | 浦部清治 (副領事) | |
| 1939年 (7/1) | 鈴木六郎 (総領事) 浦部清治 (副領事) 橋丸大吉 (外務書記生) 塩見聖策 (外務書記生) 木村信嘉 (外務書記生) 松本章治 (外務書記生) | 高澤貞義 (領事) 帰朝中 中山又次 (外務書記生) 伊藤廣太 (外務書記生) |
| 1940年 (2/1) | 鈴木六郎 (総領事) 浦部清治 (副領事) | 高澤貞義 (領事) 帰朝中 |
| 1940年 (8/15) | 鈴木六郎 (総領事) 浦部清治 (副領事) | 高澤貞義 (領事) 帰朝中 高島唯之 (領事) |

(出所) 内閣印刷局編『職員録』内閣印刷局、1936年～1940年から作成。

東亜新情勢下に於ける佛即の重大性を説き、皇國に於ける輿論の喚起を主張していた。然るに新聞紙の報道する所によれば「塩見聖策氏は去る一月雲南國境説察旅行中、越境せる支那正規軍に拉致され、龍州より重慶に護送されスパイ嫌疑にて銃殺さるべし」と、心痛に堪へず。安南土民の経営する茶館の棋上に於て浅黒い顔の底にするどく光る瞳に熱をこめて東亜の明日を語つた氏の面影が我が眼底に髣髴と浮ぶ。我々は氏の言葉を誰かに傳へねばならぬ義務があるやうな気持ちに襲はれる。

翌1939年の36期生においては、中国側に拉致された塩見に誘発されて、書院生が中越國境を探検し、仏印側の憲兵に不審者として捕えられている¹⁸⁾。1937年から1939年にかけては、仏印当局が日本人の活動についてかなり敏感に反応し、スパイ容疑がかけられては国外退去命令が続発していた。国外退去命令には、どのような事例があったのであろうか、次に外務省の執務報告からその様子を見ていこう¹⁹⁾。

日中戦争開始前には、「遠藤大尉河内退去新聞発表事件」(1937年2月)のスパイ容疑、その遠藤大尉と親交があった宮崎省造にも「宮崎省造追放事件」(1937年3月)があり、両者は国外追放となった。遠藤大尉は、1936年5月から10ヵ月の予定で仏語研究の目的で在留していたが、雲南國境付近で撮影行為、地図を持参するなど、それがスパイ行為であるとみなされた。この遠藤大尉をはじめとする、日本陸海軍による語学研修生度は、表3と表4にあるように、語学研修生として語学教育と現地留学を推し進めていた。しか

18) 「仏領印度支那 援蔣輸血路仏印を暴く」『大旅行記』東亜同文書院、1940年、331-332頁 [大旅行誌 31]。

19) 『外務省執務報告 欧亜局 第2巻(昭和13年)』(欧亜局第3課昭和13年執務報告) クレス出版、1994年、161-166頁。『外務省執務報告 欧亜局 第1巻(昭和11・12年)』(欧亜局第3課昭和12年執務報告) クレス出版、1994年、103-105頁。

し、遠藤悦大尉を最後に語学将校派遣は、次のように終了となった²⁰⁾。

仏印へ語学将校派遣ニ関スル件「仏語研究ノ為出張」ノ名目ヲ以テスル陸軍将校ノ
仏印派遣ハ昭和十一年四月任命ノ遠藤大尉ヲ最後トシテ支那事変発生以来行ハレサリ
シ処（以下省略）

表3 東京外国語学校陸・海軍委託学生修了者数（1908～1943年）

| 修了年 | 月 | 陸軍 | 海軍 | 備考 |
|-------|----|----|----|----|
| 1908年 | 3月 | 1 | | |
| 1909年 | 3月 | | | |
| 1910年 | 3月 | 1 | | |
| 1911年 | 3月 | | 11 | |
| 1912年 | 3月 | 1 | 7 | |
| 1913年 | 3月 | 1 | 11 | |
| 1914年 | 3月 | 2 | 11 | |
| 1915年 | 3月 | 1 | 7 | |
| 1916年 | 3月 | 3 | 9 | |
| 1917年 | 3月 | 25 | 11 | |
| 1918年 | 3月 | 26 | 12 | |
| 1919年 | 3月 | 19 | 6 | |
| 1920年 | 3月 | 33 | 12 | |
| 1921年 | 3月 | 31 | 14 | |
| 1922年 | 3月 | 32 | 11 | |
| 1923年 | 3月 | 37 | 12 | |
| 1924年 | 3月 | 46 | 13 | |
| 1925年 | 3月 | 37 | 11 | |
| 1926年 | 3月 | 32 | 9 | |
| 1927年 | 3月 | 31 | 8 | |
| 1928年 | 3月 | 29 | 4 | |
| 1929年 | 3月 | 20 | 7 | |
| 1930年 | 3月 | 14 | 8 | |
| 1931年 | 3月 | 16 | 6 | |
| 1932年 | 3月 | 15 | 9 | |
| 1933年 | 3月 | 13 | 8 | |
| 1934年 | 3月 | 16 | 6 | |
| 1935年 | 3月 | 15 | 7 | |

20) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B02130200700、執務報告 昭和十五年度南洋局第二課（南洋-26）外務省外交史料館。

| | | | | |
|-------|----|----|----|----------------|
| 1936年 | 3月 | 10 | 8 | |
| 1937年 | 3月 | 8 | 18 | *陸軍3月と9月修了を合算 |
| 1938年 | 3月 | | 10 | |
| 1939年 | 3月 | 2 | 10 | |
| 1940年 | 3月 | 2 | 8 | *海軍3月と10月修了を合算 |
| 1941年 | 3月 | 1 | 6 | |
| 1942年 | 3月 | | 1 | |
| 1943年 | 3月 | | 1 | |

注1：陸軍は「外国語奨励規則」1908年4月30日(陸通40号)により外国へ派遣。1908年～1917年の陸軍は専修科(夜学2年)含む。改正(1915年8月12日)委託学生として1～2年語学学習、修了者のうち若干名を外国で語学研修(6～10ヵ月)。採用者標準30名以内。

注2：海軍は、海軍大学校選科に語学専修課程設置(1908年8月7日)、外国語学校に委託(同年10月31日)。ロシア語と支那語専攻者は後半をハルビン、北京で実習(1926年～)。採用者標準16名を予定。

(出所) 秦郁彦『日本陸海軍総合事典(第2版)』東京大学出版会、2005年、614～624頁より作成。

表4 東京外国語学校陸軍委託学生及び仏印留学生

| 学科 | 階級 | 名前 | 年齢 | 修了年・月 | 留学先 |
|----|-----|-------|----|---------|-----|
| 仏語 | 歩中尉 | 平賀亨二 | 21 | 1918年3月 | ハノイ |
| 仏語 | 砲中尉 | 岡田実 | 20 | 1919年3月 | ハノイ |
| 仏語 | 歩中尉 | 長谷川彰一 | 22 | 1919年3月 | ハノイ |
| 仏語 | 歩中尉 | 桧田与三吉 | 22 | 1919年3月 | ハノイ |
| 仏語 | 工中尉 | 阿野忠章 | 26 | 1920年3月 | ハノイ |
| 仏語 | 砲中尉 | 神谷憲三 | 35 | 1930年3月 | 仏印 |

(出所) 秦郁彦『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会、2005年、615～621頁から作成。

さらに、日中戦争によって雲南から日本人の引揚げが始まり、仏印には約10人が避難してきた。それに対して仏印当局は、非難した日本人に滞在手数料の徴収を要求してきた(1938年1月中旬)。雲南引揚げ者の一人、山内正路が仏印憲兵から住所不定のため追放命令を受けた(1938年1月27日)。また、ヴィンにて仏印軍の大演習が行われとことに際して、在ヴィンの岸本商店社員が外出禁止を受けた(1937年12月中旬)。在ハイフオンの江原嘉雄をスパイ行為と暴力事件により追放した(1938年6月)。南部においては、サイゴンの大南公司、塩田商会などが家宅捜索を受けている(1938年10月)。さらに、台湾軍囑託の原荒衛と大阪毎日香港支局員の横田高明が書類の押収を受けた(1938年11月)。

雲南から避難した山内正路は、1923年から台湾銀行香港支店に勤務し、1928年から雲南省昆明市で日本雑貨の貿易商を営んでいた。日中戦争により昆明からハノイに避難した

ものの、上述したように国外追放なり、日本に帰国した。彼のコメントによると、仏印当局が日本人に尾行をつけるなど、排日的な態度が横行していることが報告されている²¹⁾。1938年と1939年に仏印を訪れていた東亜同文書院生も仏印側の対応に、同じような印象を受け、仏印当局の反応を敏感に感じ取っていた²²⁾。仏印当局からの警戒が嚴重になっていたものの、ハノイとサイゴン領事館は消極的な対応しかできず、仏印側を刺激させないようにしていたようである²³⁾。

また、現地で起業した大南会社の松下光広社長が、仏印当局からベトナム独立運動家との繋がりを警戒され、スパイ罪で国外追放となっていたのもこのときである²⁴⁾。仏印当局にとって、中国で日本の占領地が拡大していくことで仏印に迫って来る不安、一方で日本人がベトナム独立運動家たちとの接触によって、彼らを支援するのではないかという懸念などがあって、仏印当局は現地日本人の行動を警戒していたものと思われる。この時期の資源獲得の視点からアプローチした安達宏昭によると、仏印当局は日本人の活動に好意的ではなかったとしているが²⁵⁾、これらの対応を見る限り、事態はもっと深刻だった。

こうした状況のもとで、塩見が中越国境付近を調査し、中国側に捕えられていった。次にこの拉致事件に対して、周囲はどう対応したのかを整理した。

3、中越国境視察と拉致事件

拉致については、大屋久寿雄の遺稿に詳しいが、大屋の推測も入っているため真偽の確認は難しいものの、拉致までの大筋としての経緯は新聞記事の通りである。いくつか次のような追加情報がある。塩見は、1938年12月28日の午後に仏印の広西省国境付近へ視察に出かけ、29日の夕方には戻る予定だった。大屋の見解としては、塩見の恋人（父：中国人、母：ベトナム人）や現地で車に同乗したベトナム人青年などの行動に不審感を抱き、中国側の陰謀ではないかと推測していた。ちょうど、汪兆銘（汪精衛）が重慶を脱出してハノイに潜入したのではないかという情報が入り、その真偽を大屋が確かめようとしていたときである。確かに汪兆銘は、1938年12月にハノイに潜伏していた。

これが、どう塩見の拉致と結びついたのかは、分からないが、なぜ、大屋がここまで塩

21) 読売新聞 1938年4月7日。

22) 「暹羅あちこち」東亜同文書院『靖亜行』1939年 [大旅行誌 30]。「仏領印度支那 援蔣輸血路佛印を暴く」『大旅行紀』1940年 [大旅行誌 31]。

23) 前掲、『外務省執務報告 欧亜局 第1巻 (昭和11・12年)』104-105頁。

24) 立川京一「第二次世界大戦期のベトナム独立運動と日本」『防衛研究所紀要』第3巻第2号、2000年11月、75頁。北野典夫『天草海外発展史 (下)』葦書房、1985年、258-259頁。北野典夫『南船北馬 — 天草海外発展史 (後編)』みくに社、1982年、196頁。

25) 但し、安達によると民間レベルでは友好的だったことが指摘されている (安達宏昭『戦前期日本と東南アジア』吉川弘文館、2002年、92頁)。

見の行方を心配するかということ、大屋自身が塩見と一緒に国境視察に行くはずだったからである。塩見が視察に行く 12 月 28 日は、大屋が軍法会議に出廷することになっており、一緒に行くのを断った。それでも塩見は一人でも行くと言って出発したのだった²⁶⁾。国境での拉致が何かの陰謀だったとしたら、一緒に行ったであろう大屋も中国側に捕えられ、彼の行く末も大きく変わっていたことになる。

前述したように当時の日本の新聞では、1939 年 2 月 4 日の記事が最後であり、塩見のその後の消息は分かっていない。日本の外交資料においても、拉致直後の 1938 年 12 月末と²⁷⁾、翌 1939 年 7 月の在上海フランス人神父ロベール・ジャキノ (Robert Jacquinet) に次のように救出を依頼したのが最後となった²⁸⁾。内容は、「ジャキノは数回、宋子文を通して重慶政府と折衝をするが、塩見は軍事スパイゆえ単独の引き渡しは出来ないとの返答。捕虜交換として救出するほかないが、将来、適当な機会に救出の配慮を願いたい」という外務省から陸軍に宛てた依頼文であり、その後の文書は見当たらない。

このように、日本側の塩見に関する情報は、限られたものしかなかった。在ハノイ領事館では、その後の「松岡・アンリー協定」(1940 年 8 月 30 日)、北部仏印進駐 (1940 年 9 月)、日仏印経済交渉および資源調査団派遣 (1941 年 10 月)、在外公館である大使府開設 (1941 年 10 月) として人事再編などが続き²⁹⁾、塩見の搜索どころではなくなったと推測できる。日本側の現資料で分かることはこれだけである。次に、国民党側の外交文書から塩見の足跡を追ってみたい。

4、中国側での対応

塩見は、中国側でどのような対応を受けたのであろうか。塩見は、龍州省対汎署によって拘束されたことは国民党外交文書で確認できる。それによると、仏印国境の鎮南関の約一里手前まで、車で来ていたところ中国領土内にて捕獲された。龍州省対汎署は、間諜と認めたとわけではないが拘禁すべきであると判断した³⁰⁾。

拘束当時の国民党外交部、広西省政府、ハノイ領事館とのやり取りでは、塩見を最初「SUMI」と間違え「SHIOMI」の名前と身分確認から始まった。その後、「塩見は確かに

26) 前掲、大屋『戦争巡歴』228 頁。

27) 外務省から大本営陸軍部 (1939 年 7 月 27 日) へ「塩見書記生拉置 (ママ) 事件」として報告 (『外務省執務報告 欧亜局 第 2 巻 (昭和 13 年)』欧亜局第 3 課昭和 13 年執務報告、160 頁)。

28) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C04014769200、昭和 14 年 8 月「壹大日記」防衛省防衛研究所。

29) ハノイ領事館は、大使府として再編される。

30) 国民党外交資料 (台湾、國史館所蔵)「龍州對汎署捕獲日本駐河内總領事館書記生鹽見聖策案 (亞洲司亞科第 71 号卷) (1939 年 1、2 月)」『東亜司毎日工作報告 (1939 年 1 月～1941 年 1 月)』(典藏号 020-019903-0044)。

中国内で拘束されたのか」の確認などが続いた。1939年1月17日の広西省政府（桂林）から外交部への電信によると、塩見の身分は「領事のもとでは権限責任のある助手である」ことが分かった。また、塩見の供述によると「拘束された場所は南関口で、法律上は安南境界であり逮捕されるべきではない」「誤っているのは先様であり、私は誤っていない。フランス側はとり成しをしていない、慎重にご判断いただきたい」と答弁していた³¹⁾。

しかし、状況は芳しくなかった。2月10日にフランス大使館の秘書が外交部の徐次長に照会したところ、徐次長は「間諜であることは明らかなので早々に銃殺する」と返答している。情報が錯綜するも2月21日の上海電では一転して、「塩見書記生の釈放問題に触れ、所持品から間諜行為の証拠となり得るものの、当初は塩見を銃殺にする予定だったが、重慶（政府）の阻止伝令があって桂林に移され、塩見の安全が図られた」とある³²⁾。この背景には、ちょうど1938年10月から11月にかけて、蒋介石が反戦捕虜政策を推し進めるために鹿地亘を活用していたときである³³⁾。

鹿地亘は、日本の反戦平和活動家で、1936年1月末から上海を中心に活動を始めていた。1938年3月に国民政府軍事委員会政治部が鹿地を政治部設計委員会委員として招請し、国民党政府における捕虜工作の役割を担っていく人物である。塩見の処遇が決まり、決着を迎えるにあたり、重慶国民政府外交部がまとめた塩見拘束事件の報告書は、次のようになっていた³⁴⁾。

* 塩見拘束事件概略

- (1) 事件原因：1938年12月29日、在ハノイ日本総領事館書記生塩見聖策（Seisaku Shiomi）が中越国境にて我々に拘束される。
- (2) 拘束の経過：1938年12月28日、塩見は我々の輸送状況を偵察するために列車に乗り、ハノイから鎮南関に向かい、同夜は郎宋（Lang Son）に投宿した。翌早朝に車にて鎮南関のふもとに着き、我々の守備軍に拘束される。桂越境界、関門前約一里のところであった。
- (3) 拘束後の取調状況：龍州對汎署での塩見拘束後、龍州区指揮部に移送し、取調べとなる。彼の自供によると、ハノイ日本領事館書記で、遊歴で中国に来たのであり、まったくもって間諜ではないとのこと。その後、桂林幕営に護送、審問。

31) 国民党外交資料（台湾、國史館所蔵）「來電 1938 年 1 月 17 日（第 5552 号）」『龍州對汎署獲得日外書記生鹽見案（1938 年 12 月 30 日～1939 年 10 月 16 日）』（典藏号 020-010102-0072）。

32) 国民党外交資料（台湾、國史館所蔵）「情報 上海（1939 年）2 月 21 日電」『龍州對汎署獲得日外書記生鹽見案（1938 年 12 月 30 日～1939 年 10 月 16 日）』（典藏号 020-010102-0072）。

33) 前掲、菊池『日本人反戦兵士と日中戦争』19 頁。

34) 国民党外交資料（台湾、國史館所蔵）「龍州對汎署捕獲日外務書記生鹽見案節略」『龍州對汎署捕獲日外務書記生鹽見案（1939 年 1 月～1941 年 1 月）』（典藏号 020-010102-0072）。

(4) 塩見聖策を敵から見方に：塩見聖策を桂林幕営に護送後、鹿地亘を派遣し接見させるとともに、たびたび人を送り訊問した。秘密裏に観察するも間諜の様子は見られず。宣伝の手伝いを自ら申し出た。後には、ついに名目を与えることになり、監視の下に業務を課す。塩見は敵から味方となった。

中国側での一連の流れは、(1)～(4) のようになっていた。国民党重慶政府によると、塩見は桂林に移送後、早い段階で鹿地亘と接見している。そして、宣伝工作の手伝いをするようになった。鹿地の説得、思想教育を受けて次第に「転向」していったのだろう。最終的には、国民党から「もはや敵ではない」と認められるようになった。これより前の「国民日報7月18日」では、当局の許可を得て参謀所で仕事を始め、少校階級で生活費を支給されおり、仕事を果たしている³⁵⁾。

5、鹿地亘と塩見聖策

日中戦争で負傷した日本兵たちは中国軍に捉われ捕虜となったが、中国は内戦状態にあったため、中国共産党が指導する八路軍や新四軍、重慶の国民政府指揮下の軍があり、捕虜といっても中国のどの軍なのかによって異なる。しかし、これまでの研究では、中国側の捕虜政策が勢力によって違いはあるものの、共通しているのは捕虜優遇の姿勢があったことである。これら中国における捕虜政策の違いや日本人の反戦運動については、藤原彰、姫田光義（1999）に詳しい。姫田光義は、この著書の冒頭で「それまで骨の髄までしみこんでいた天皇制軍国主義の思想、精神の呪縛から解き放たれ、日本の侵略戦争本質を理解するようになって自ら反戦平和と日中友好の道へと進むようになった」と述べている³⁶⁾。

日本人捕虜に思想教育を施すといっても、反戦教育をどう実践するかにあったようであり、捕虜教育に先立って1937年に日本の言語や文化に通じた人材教育のために、日本に留学した経験を持つ人を集めた特別訓練班が設けられた。こうした重慶国民政府支配下の日本人反戦運動のリーダーは、鹿地亘だった。鹿地は、1939年8月から反戦同盟の設立を宣言しており、12月には反戦同盟西南支部を発足させ、重慶の反戦同盟総部が1940年春には本格的な活動を開始した。しかし、1941年8月には、重慶国民政府から鹿地亘が共産教育をしているのではないかと指摘され、反戦同盟は解散させられたものの、別名称

35) 国民党外交資料（台湾、國史館所蔵）「俘虜感厚遇」（新聞記事切抜）国民日報7月18日『龍州對汎署捕獲日外務書記生鹽見案（1939年1月～1941年1月）』（典藏号020-010102-0072）。

36) 前掲、藤原・姫田『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』19頁。

の組織がつくられ捕虜教育が実践されていった³⁷⁾。この日本人反戦同盟の活動が最も活発だったときに塩見聖策は、鹿地亘と接見した。そして、次第に鹿地らの反戦活動に傾倒していくことになる。

塩見と鹿地との関係を知る資料として、塩見が鹿地にあてた直筆の手紙がある³⁸⁾。手紙によると、新設された敵情研究組について書かれており、鹿地が来てから仕事を始めたいこと、反戦同盟義勇軍を組織するにあたって鹿地が苦慮したことのお礼、桂林にいる日本人への「俘虜教育」の様子やこの捕虜を全部重慶に移す必要がないことなどが書かれていた³⁹⁾。

さらに、もう一通の手紙では、「一刻も早く貴兄（鹿地）の来桂を待っている」ことや、桂林に諸々の問題が発生して「貴兄の御来桂の可能、不可能を一つ早速お知らせくだらないでしょうか」と返事を急ぐものもあった。また、捕虜は30人ほどいて、「その中には転向しかけている幹部級のものが2、3人いる」と伝えている。最後に「お互い身体に気をつけて、大いにやりましょう」と励ましていた⁴⁰⁾。

このことから、桂林では日本人捕虜の問題を抱え、それを解決するのは鹿地しかいないと塩見は考えていたようである。このとき塩見は、桂林の行営参謀処に勤務し、新設予定の敵情研究組の準備をしていた。仕事の内容は、外交に関する各種問題を研究し、收音組の仕事も手伝っていた。手紙は、単独ではなく、呉石処長の下で廖濟寰⁴¹⁾と連名の書簡だった。呉石は香港や仏印へも出かけていた（1939年8月15日～9月はじめまで）ことが書かれている。鹿地は、1939年11月22日に「紹介同士塩見聖策」という文章を、塩見自身も反戦への「声明文」を出している⁴²⁾。また、外務大臣宛での辞職願を出したことになるが、受理された記録はない⁴³⁾。

37) 内田知行・水谷尚子「重慶国民政府の日本人捕虜政策」前掲、藤原・姫田『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』56-58頁。

38) 鹿地亘資料調査刊行会『日本人民反戦同盟資料（第3巻）』不二出版、1994年、223頁。同、第9巻に資料一覧がある。立命館大学国際平和ミュージアムの寄贈寄託資料にも塩見聖策から鹿地亘宛ての手紙が収蔵されている。

39) 手紙1939年9月1日、立命館大学国際平和ミュージアム寄贈寄託資料（資料番号9002661）。

40) 手紙1939年9月25日、立命館大学国際平和ミュージアム寄贈寄託資料（資料番号9002662）。

41) 東京帝国大学経済学部に留学経験があり、上司の呉石とともに鹿地亘の反戦運動の支持者となる。

42) 塩見聖策「声明文」1939年11月22日、立命館大学国際平和ミュージアム寄贈寄託資料（資料番号9002961）。

43) 内閣印刷局編『職員録』内閣印刷局、1936年～1940年によると、1939年7月1日までは塩見の名前が確認できるが、それ以降はない。『外務省報』でも辞職の確認が取れていない。

6、敵情研究組

中国の哲学者、丘成の回想録に塩見が登場する⁴⁴⁾。この回想録によると、丘成が広西大学から国民党の軍事委員会桂林弁公所にある第二処敵情研究組に赴任にしたとき、そこに塩見が働いていた。最初、丘成は塩見の存在に驚き、その事情を研究組長が説明した。その内容は、塩見は中越国境へ視察に来たとき、誤って国境を越えてしまい、国境防衛軍に捕まり桂林に護送され、そこで思想教育が繰り返され、後に「日本帝国主義がやっていき中国侵略戦争は正義にあらず」ということに気づいたようだ。第二処敵情研究組というのは、現地新聞に発表された戦況を敵向（対日）に放送するというものだった。組のメンバーは、ほとんどが日本留学経験者で占められていた。塩見との会話は日本語であり、後に塩見は中国語を覚え、新聞も理解するようになっていった。

そして、丘成は、塩見と寝食を共にすることで友情が芽生えていった。一緒に食事に行っては、おごったり、おごられたりする関係になっていた。塩見の様子は、衣服や靴を整えて、身なりを気にしていたことが丘の印象に残っていた。また、塩見は日本の政局に関する評論を書き、それを丘が翻訳して桂林で発行する新聞に掲載するなど、言論活動を行っていた。それは「中国が長期戦の末に必ずや最後には勝利する」という中国の勝利を喚起する文章だった。しかし、戦局は日本軍が桂林を攻略することになる。塩見はメンバーと共に移動し、貴州省を経て四川省までたどり着いた。丘には、抗日戦争と一緒に闘った中国人民の友としての思いが残っている。丘自身、塩見のその後は知らない。

7、『抗日論説』と『在中國四年』

塩見は、2つの文章を残している。一つは、『抗日論説（日本人の安南侵略を暴露す）』（1940年）⁴⁵⁾と、二つ目は、その4年後『在中國四年』廣西日報社（1943）⁴⁶⁾を出している。『抗日論説』の内容は、日本の南進政策において仏印は、単に原料や資源を獲得するとい

44) 丘成「反战斗士盐见圣策」中国民主同盟中央委员会『群言』（北京市）第3期、1995年、3月。丘成（1917～2007年）中国の哲学者で日本に留学経験がある。

45) 『抗日論説（日本人の安南侵略の陰謀を暴露す）』台湾拓殖株式会社、1940年5月15日（菊池誠一氏所蔵）。菊池氏が東京の古書店で入手したもので、塩見が中国側に拘束される前の1938年7月21日付けの手紙が同書『抗日論説』に挟まっていた。塩見から岩本昌一に宛てたもので、もう一人、台湾拓殖の難波という名前の記述があった。難波は香港事務所（1944年時）の難波忠と思われる。手紙には「昨今は当地も益々重要性を帯びてきましたので、吾々も一層多忙となっています」「台拓の方は多忙な仕事を少人数で克く切りまわして居られます」と塩見からの労いの言葉が添えられていた。

46) 所蔵するハーバード大学の書誌情報では「塩見聖策 Shiom, Seisaku. 『在中國十年 (Zai Zhongguo shi nian)』廣西日報社, 民國 32 [1943] [China]」となっているが、ピンインの入力間違えで, si nian (四年) に「h」が入って shi nian (十年) になったのであろう。正しくは『在中國四年』。

う経済的侵略を意図するものではなく、同時に政治的、領土的侵略の野心を持っている。それは、1936年4月から1938年12月までの約3年間に渡って、ハノイ日本総領事館員として日本政府（日本帝国主義者）の経済的、政治的侵略の野心陰謀およびその実行状況を認識してきたのが自分であること、経済的侵略においては軍の命を受けた山根道一が仏印に送り込まれ、国策会社の台湾拓殖会社が事業を開始していることから明瞭であること。また、それ以前、中日関係が緊張しつつあるときにはすでに陸軍の遠藤悦歩大尉を送りこんで軍事探偵をしていた（のちに退去命令）。そのときの彼の軍事探偵の様子は自分の知るところであると書かれている。

遠藤悦歩においては前述した通りで、山根道一は、1937年に沢山商会のハノイ代理人として仏印に赴いたが、後に台湾拓殖に沢山商会が買収され⁴⁷⁾、その子会社である印度支那産業の代表となった。鉱山開発などの事業に関わり、仏印側との交渉役であった⁴⁸⁾。山根は1937年から1940年にかけて台湾拓殖をはじめとする経済進出において重要な役割を担った人物であり、その山根の存在そのものが経済侵略の代表であると塩見は『抗日論説』に記述している。なぜこのような内容が、この時期に台湾拓殖から発行できたのか疑問が残る。

一方、1940年9月、桂林で塩見はアグネス・スメドレーと会っていた。スメドレーはフリーランスの記者として中国大陸を回っているときに身体を壊し、一旦香港で休養しようとして桂林に立ち寄ったときだった。スメドレーは、重慶から桂林に来て、そのあとで香港に向かった。スメドレーによると、桂林のある広西省は、言論や集会の自由を認めており、中国のほかの土地から追放された作家や編集者が集まって活動を続けられる、いわば民主主義の要塞のようなところだったらしい。スメドレー自身、香港での治療を終えたら広西省に戻り、インドシナ戦線に行こうと考えていた。しかし、それは叶わず香港からアメリカに戻ることになる⁴⁹⁾。

桂林では、ラジオ放送に出演し、放送が終わって出てきたときに塩見から声をかけられた。『中国の歌ごえ』（1957）では「塩見清作」と訳されていたが⁵⁰⁾、内容は確かに塩見聖策のことである。スメドレーから見た塩見は、中国語、英語、フランス語の3つの言語を話し、まるで中国人のように生活をし、働いていたという印象だった。中国側に捕まったときは、すべてを拒絶していたこと、その後に鹿地と出会い、反ファシズム運動に参加するようになったこと、今は「本当の平和と正義のために働いている」といった会話の内容

47) 内川大海『シルクロードの夢—ある青春の記録』私家版、1993年。

48) 立川京一「第二次世界大戦期のベトナム独立運動と日本」『防衛研究所紀要』第3巻第2号、2000年11月、72-73頁。

49) 前掲、スメドレー『中国の歌ごえ』406-408頁。

50) 前掲、スメドレー『中国の歌ごえ』406頁。

が語られていた。

また、スメドレーは、塩見のことを「内部の葛藤にひきさかれてでもいるように、神経質な調子で早口にしゃべった」と書いている。さらに、「彼のような教育を受けた人間が、終生のものの見方と生活態度をかんとんに脱皮できようとは信じられなかった」と疑いの思いを抱いた。しかし、塩見はスメドレーに「日本軍があの声（ラジオ）は日本領事館員の声ではないと言って否定してこまるから、行く先々で『僕と会って、直接話をしたということをみんなに伝えてください』」と言ったことで、彼を信じはじめたようだった。

塩見聖策はスメドレーに、「日本の軍国主義者たちは、ただ自分たちが白色帝国主義にとって代ろうとしただけであり、日本の支配者も他国の支配者と同じように、平和なときには庶民を財源として利用し、戦時になると大砲の餌食としているだけなんです」と訴え、実際に日本の部隊や民衆向けに反戦放送をしていた。「反逆罪という烙印を押される行動の第一歩を踏み出すまでにはずいぶんと時間がかかったであろう」が、スメドレーの感想である⁵¹⁾。

前述した『在中國四年』（1943年）のなかには、中国側に捕まってから自殺を試みたことが記されていた。やはり相当な葛藤があったのだった。そこをスメドレーが疑問に思い、彼の葛藤を見抜いたことになる。

また、塩見は反戦活動の機関誌制作にも携わっていた。機関誌『国際』の第64～70号（1945年2月15日～5月15日）まで担当している⁵²⁾。こうして塩見は中国に留まり、反戦・抗日活動に深く関わっていくことになった。

8、上海から引揚げと戦後

日本人の反戦同盟員らは、井上桂子によると「長谷川部隊と名乗り、上海からの帰還船に乗船した」ことになっている⁵³⁾。重慶からの日本人引揚げ者に関しては、先行研究によると、内陸部の日本人は上海に集まり、引揚船に乗ったことが明らかにされている⁵⁴⁾。

上海には集中営と呼ばれるいくつかの日本人収容所が設置され、国民党の管理下で引揚船に乗るまで居住していた。多くの日本人が当時のことを証言として記録に残している⁵⁴⁾。

51) 前掲、スメドレー『中国の歌ごえ』406頁。

52) 鹿地亘資料調査刊行会『日本人民反戦同盟資料（第9巻）』不二出版、1994年、95、99、103、107、111頁。

53) 前掲、井上『中国で反戦平和活動をした日本人』188頁。

54) 厚生省援護局『引揚げと援護三十年の歩み』厚生省、1977年、88頁。菊池一隆『日本人反戦兵士と日中戦争』お茶の水書房、2003年、202頁。内田知行・水谷尚子「重慶国民政府の日本人捕虜政策」前掲、藤原・姫田『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』58頁。

55) 前掲、菊池『日本人反戦兵士と日中戦争』。前掲、藤原・姫田『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』。

菊池一隆の集めた証言にも塩見が登場する。反戦同盟の同盟員である朝永吉郎が、「終戦が間近になると、日本人捕虜のほとんど全部が重慶に集められた。仏領インドシナのベトナムにある大使館か領事館員の塩見聖策もいた。彼は鹿地と仲がよかった」と証言している⁵⁶⁾。

作家の堀田善衛もまた上海にいた。彼の塩見に対する印象は、「今日重慶にいた塩見聖策という人が来た。身体のかなしも皮膚の色も全くの中国人である。先日来た中宣の台湾中華日報の林さんなんぞよりも中国人である。感じはよくない。濁っている、それでいて澄んでいる。これは元来中国人なのであるが、それよりも中国人であるということは、化物である。ここにも一人の国際の化物」(1946年5月2日)と日記に残していた⁵⁷⁾。塩見は、他の同盟員と一緒に日本に引揚げたものと思われる。

残念なことに、塩見に関する戦後の記録はほとんどない。僅かながら、大阪外国語大学(現：大阪大学)の同窓会誌には、仏語部の集まりに塩見の参加記録が残っていた⁵⁸⁾。1989年11月22日にフランスのバランス市で仏語部の同窓会が行われ、そこに塩見が参加していた。戦前、大阪外国語学校でフランス語を教えていたポール・イズレール先生のもとに教え子たちが集まり、同窓会を開いたのである。塩見は現地参加で、行き帰りを単独で旅をして日本に戻ったであろうことが記されていた。戦後も日本の恩師畠中敏郎先生、ポール・イズレール先生と親交を深めていたようである。それ以外、塩見の戦後はほとんど分かっていない⁵⁹⁾。

まとめ

外務書記生の塩見聖策を歴史の中でどう位置づけられるかが、本稿の一つの目的であった。塩見聖策は、日中戦争という時代に翻弄されて仏印と中国の両方を体験することになった人物である。最初は、仏印の外務書記生として、もう一方の中国体験は国民党重慶政府の捕虜だったが、後に現地で反戦運動に関わっていくことになる。彼の足跡は、これまで多くの文献に断片的に登場するも、このように整理することで、当時の外交の一端と彼の置かれた状況を明らかにすることができた。彼のアジア体験は、彼自身にとって、一

56) 前掲、菊池『日本人反戦兵士と日中戦争』273-274頁。

57) 紅野謙介編『堀田善衛上海日記』集英社、2008年、150頁。

58) 井塚直人「フランス・ミュゲの会(1989年11月22日開催)」「咲耶」(同窓会誌)第15号、1990年2月、107頁。

59) 「仏印を記録する会」によって、1940年前後仏印に在留していた人たちによる座談会が実施された(1973～1975年)。その中の「資料集(1)原田玄竜氏を囲んで(台湾拓殖社員)」では、塩見の戦後のことに僅かながら触れている(ベトナム協会『仏印進駐時代のヴェトナムにおける日本人の足跡』(平成7年度外務省委託調査報告書)、1996年3月)。塩見聖策は、2003年9月に故郷で亡くなった。

つは葛藤であり、続く思想の変化、その後は反戦を訴え続けたことに表れている。

もう一つの大きな課題である、両地域で日本人が置かれた状況については、先行研究においても研究のはざまの時期である。本稿では、日本人に対して仏印当局からの警戒がどのようなものであったかを確認した。それは、在留した塩見聖策をはじめ、報道機関の大屋、陸軍語学研修生の遠藤悦歩、現地日本商の大南公司など、それに関連した人たちがスパイ容疑をかけられていたことから理解できるだろう。また、塩見聖策自身が、中国側に拉致され、生き延びたことから、当時の国民党重慶政府下での日本人の状況を読み解くことができる。仏印と中国双方を体験するという稀有なケースであるが、こうした経験そのものがこの時代の危うさを反映させているとも言える。

本稿では、日本側の資料および国民党の外交資料、回想録などを使い、塩見を通して当時の状況を検討してきた。今後は、フランス側資料との付け合わせが必要であろう。多くの課題はあるものの、本稿で塩見聖策の足跡を整理し、記録として残すことが出来たことは、一つの成果である。

[付記]

本稿は、JSPS 科研費（課題番号：25243007）と（課題番号：18K00983）による研究成果の一部である。